



白桜小だより

平成 29 年度 9 月 号
中野区立白桜小学校
校長 宇賀神 佳子
平成 29 年 9 月 1 日発行

子供の時の挑戦から得るもの

校長 宇賀神 佳子

学校に子供たちの歓声が戻りました。一人ひとりが思い出を抱えながら、また一段と逞しくなったようにも感じられます。子供たちはどんな夏休みを過ごしてきたのでしょうか。

私は、今話題のミュージカル「ビリー・エリオット～リトル・ダンサー～」を見ました。副校長先生に触発され、宝塚出身の柚希礼音さんにも魅かれていましたし、「花子とアン」で好評だった吉田鋼太郎さんにも興味がありました。ビリー役は小学校 5 年生の木村咲哉さんです。小学生がこんな大きな舞台上で活躍するとは！というのも関心の一つでした。

このビリー役は 2015 年 11 月からオーディションが始まり、バレエ・タップダンス・アクロバット・演技の指導を受けながら、最終的には 1300 人以上の応募者が 5 人にまで絞りこまれました。11 歳の少年を想定した役柄に、こんなに高度な技術が要求されるのは、日本では今までなかったことです。応募の様子や練習風景もインターネットに掲載されていましたが、彼らを見てみると、少年期にこうした大役に挑もうという志をもつこと、指導を受けて高度な技を確実に習得していく様子に、すごい経験だなとつくづく感心しました。

とりわけ私が思うのは、子役に決定するまでの応募者の心情です。その心情をどのように想像したらいいのでしょうか。役を得る目標はあれど、自分を鼓舞しながら進めないと、途中で、気持ちが折れてしまうことだってあるでしょう。その道のプロによる厳しい練習に自分の力の限界を知ることだってあるかもしれません。「自分はこの役を演じたい」という気持ちを強くし、今自分ができることを精一杯やっていく、そのように応募者の気持ちを想像すると、舞台上でスポットライトを浴びて踊る子役だけではなく、今回は舞台に上れなかった多くの子供たちにも大きな拍手を贈りたい、そんな思いに駆られます。子役を得る得ないの結果よりも、こうした努力を積む過程そのものが、その子供の「生きた証」であり、必ずや何か形を変えて、子供の中で実を結ぶと期待したいのです。

さて、夏季休業中の水泳指導には、実に多くの子供たちが参加していました。気温が上がらない日もありましたが、逞しく水に入り、顔を付けて泳げるようになっていたり、目標とするタイムに挑戦したりする姿を見てみると、子供たちが確実に力を付けていることが分かり、私も大いに勇気づけられました。今年は皆勤賞を得た子供がたくさん出ましたが、そうした子供たちの日々の頑張りにも賞を渡したい。今こうして努力を続けていることは、水泳だけでなく、何かの形できつと成果につながって来る、そう呼びかけたい気持ちになります。

前期後半からは、「コミュニケーション能力を伸ばす」ことについて、私たち教師集団もさらに深く追究していきます。特に子供たちには、より自分とは異質なものに出合わせたいです。必ずしも自分の願うようにはならない現実の中で、相手の思いを想像しながら集団に参画し、集団の一員としての役割を果たさせたいと考えます。集団の中での他者との違いは自分のよさを見出す鏡であり、自分にとっての負の事象も自分の力に変換できるからです。

皆様には、引き続きご理解、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。